



日本都市計画学会 60周年記念号

【特集Ⅰ】

都市計画 2050年論

第1部 2050年の都市とコミュニティ

第2部 周縁の都市計画

— 2050年の生活の姿

— 2050年の都市を支える仕組み・技術

第3部 2050年の都市像

【特集Ⅱ】

理論と実践の対話

暮らし・コミュニティ
国土・地域・国際
交通
防災
緑地・環境
景観・デザイン
防犯
都市解析・ツール
制度
参加

【巻頭対談】

廃墟から未来へ

磯崎 新 × 内藤 廣

都市の見えないチカラを読み込む

陣内秀信 × 三浦 展

会長コラム

都市計画の名言

名著とその時代

地図に託した都市の未来

60周年記念事業報告

学生提案競技 / 自治体優秀まちづくりグッズ賞



LANDSCAPE ARCHITECTURE

“ランドスケープ アーキテクチャ”の今日的意味

ジョン・オームスビー・サイモンズ(著), 久保貞ほか(訳) / 1967年 / 鹿島出版会

都田 徹 Tohru Miyakoda 景観設計・東京



1965年大学卒業の時代

1963年11月のケネディ大統領暗殺は私にとってはちょうど北アルプス山行中のテントの中での出来事でした。当時、大学山岳部に属していた私はその訃報に秋山のテントの中で一瞬息をのみ思いをしたことを覚えています。

思えば、この時このサイモンズの著書をU.C.バークレイの図書室で熱心に読んでいた若者が後にサイモンズの共著者となるバリー・W・スターク氏だったのです。その後、彼はこの本との出会いで受けた衝撃がケネディ暗殺で受けた衝撃よりも大きかったということはこの本のプロローグで語っています。それほどこの本は彼にとってはサイモンズの世界へ無我夢中で引き込まれていく要素を持っていたことを物語っています。

当時、私は大阪府立大学の3年生でしたが学部時代にのめりこんでいた山岳部山行による勉強不足を取り戻すべく大学院進学を考えていました。

世の中の動きは大阪万博に始まる新しい時代と高度成長に向かう曙期の時代でした。

1970年の大阪万国博はその後の沖縄海洋博→つくば科学博→愛知花の万国博(環境博)と続く技術の発展のための“夜明け前”の時代でした。万国博と同時代には日本列島改造論が語られ、人口膨張の受け皿としてニュータウン計画が平衡して計画されていました。

高蔵寺ニュータウン(愛知)を筆頭に、既に建設されていた千里ニュータウン

(大阪),そして泉北ニュータウン(堺市),多摩ニュータウン(東京),港北ニュータウン(横浜)等がベッドタウンとして計画され、万国博が促進剤として計画されながら、跡地利用の目標が鉄道の延長とニュータウン開発への財源づくりと事業化のイベントづくりとなり、あらゆる意味での開発のモデルとなりました。このころ、ニュータウン計画ではイギリスのフックの計画がモデルとなり、さらにアメリカのラドバーン計画などを勉強することが都市づくりや都市計画を志す学生たちの目標でした。

この時代に建築・都市計画・ランドスケープを学ぶ学生たちはコルビジエの「輝く都市」やベーコンの「都市のデザイン」そしてルイス・マンフォードの「都市の文化」等の翻訳本を追い求めていました。

1961年から2000年までの約40年間で、大きく時代の変化があったミレニアム世代の2000年から2011年の10年間を比較してみると、フックの計画からニュータウン計画そしてアーバンイズムの時代へ、また、自然との共生、サステナブルからリジェネラティブ(U.C.デービスの運動)へとまたそのことへ取り組むカリフォルニア大学ボナ校のジョン・ライル氏や「デザイン・ウィズ・ネイチャー」のマクハーク氏の時代へと大きなテーマの転換がありました。さらに最近のランドスケープ分野では開発と自然との二極対決からランドスケープ・アーバンイズム運動へと変遷し、ランドスケープが都市の中でのインフラストラクチャーの役割を果たすことで重要性があると認識する時代

に突入したように感じます。

このことの原因については後半に述べるとして、大阪万国博がもたらしたムーブメントが都市計画や街づくりに莫大な影響力をもたらしたと考えます。

大阪万国博覧会原案作成委員会の熱気

大阪万国博は日本の列島開発や大規模開発に対して大きなエポックを与えました。万国博覧会というイベント終了後の跡地利用計画や都市計画、ニュータウン開発、鉄道拡張計画等を含めた大規模な都市開発へと続き、このことに係わる建築、都市計画、土木計画、緑地計画等の各専門分野間の協働を促しました。

当時、この大阪万国博覧会という国家的事業に対する取り組みは、通産省(経済産業省)が担当省庁となり、大学の上述専門分野研究室間の学際的協働のもとに進められました。

大阪で行われる万国博ということでこのマスタープランを作成するチームリーダーは当初、京都大学の都市計画派の西山研究室に決まり、デザイン協力をする川崎研究室や都市土木の研究室そして環境設備系の早稲田大学の尾島研究室等の中に、大阪府立大学の緑地計画研究室(久保貞研究室)も含まれていました。久保貞研究室にいた私がこの万国博原案作成チームに加わったことが、後にサイモンズの“ランドスケープ アーキテクチャ”との出会いにつながるようになりました。

さて、各大学専門研究室の集まりであった万国博原案作成チームの作業プロセスは、決定のためのクリティックがフェーズごとに行われました。京大チーム6ヶ月、東大チーム6ヶ月のそれぞれの節目で、高山先生、丹下先生、西山先生等が集まる会議への報告が行われ、先生たちのクリティックにより、物事最終決定が行われました。

この会議への実際の材料づくりは主として各大学の大学院の学生が作業を行い、それらのチームをリードする人たちが研究室の助手や講師の先生たちでした。作業する大教室に出入りする30人から50人の人々が日夜を問わず働いていました。出入りする人たちも前記した人々に加えて、後半の最終案をまとめる丹下チームに移った後は作業場所も東京大学の丹下研究室へと移りました。そして参加する人たちも建築家、都市計画家、設備家、緑地計画家、土木計画家などに加えてグラフィックデザイナーや通産省の役人、民間の設計事務所の人々と多種多様になりました。

覚えている限りの名前を挙げると西山先生、上田先生、川崎先生、高山先生、川上先生、渡辺先生、丹下先生、磯崎さん、山田学さん、その他グラフィックの久谷さん、そして大学院生の高口、曾根、笹田、山口、鳥栖、南条、山岡等に加えて大阪府大の安井、都田等が加わりました。また、時々顔を出す林さん谷口たちと、皆さん万国博マスタープランの進捗に興味津々で、目を輝がやかせていました。

この時代の都市づくり、街づくりの熱気は都市計画学会のシンポジウムのセッションにも表れており、“徹夜で討論する若き都市計画の集い”というテーマが早稲田大学の吉阪先生を座長として行われたりしていました。建築学科の学生も建築という枠にとらわれず、もっと大きな世界、都市計画、街づくりへと視点を広げていました。吉阪先生から学んだ人たちが後に象設計集団を形成し、地域や風土に根ざしたデザインの展開を行った

り、地域の公共空間でのアメニティデザインの展開(世田谷区の“いらか道”や沖縄での市庁舎コンペ入選etc)でも特色を発揮しています。後で知ったことですが、彼らも久保研究室と同じく、サイモンズの“ランドスケープ アーキテクチャー”を研究室のセミナーで読み回していたということを知りました。図版が素晴らしく、アーバンデザインをする上で礎になるような本だとの評価があったことを聞いています。

一方海外からの都市づくり、地域づくりに関する傾向としては、ジェーン・ジャコブスの「アメリカ大都市の死と生」やエドワード・ホールの「かくれた次元」等、社会学や心理学、広場スペースでの心理について書かれた書籍等も都市計画を目指す学生の必読書となっていました。この頃、U.C.バークレイでは「パターンランゲージ」のアレキサンダーが活躍し、MITでは「敷地計画」「都市のイメージ」で有名なケビンリンチがまだ教鞭をとっていました。カミロ・ジッテの「広場の造形」からハルプリンの「シティズ」、そしてガレット・エクボの「アーバンランドスケープデザイン」や「風景論」というのが私の浅学な記憶です。

“ランドスケープ アーキテクチャ”の今日的意味

サイモンズの“ランドスケープ アーキテクチャ”は1961年に出版以来ちょうど50年を経て4回の改訂版が作られました。この間ランドスケープ分野は環境全般に渡って範囲が広がりました。

改版ごとに今日的な章が加わり、第4版は初版時に比べて2倍の20章となっています。新しい章には次のようなトピックスが追加されています。初版の地域計画に加えて、建造物、住居等からアーバンデザイン、都市のマネージメント(成長管理)、国土スケール、地球スケールでのランドスケープや、計画された環境への問題提起等が追加され、将来への展望が結びとされています。

このようにランドスケープ分野のこの

50年の変遷は想像以上に大きく、ますますその領域は広がり、地球問題から環境問題、そして地球環境の悪化にともなう生物多様性の問題へと広さに渡ってきています。このような潮流の中、チャールズ・ウォルドハイム、ジェームズ・コーナーなどによる“ランドスケープ・アーバンイズム”というムーブメントがアメリカでは始まっています。

『世界のいたる所で都市が水平に広がる(アーバンイズムが押し寄せる)につれ、ランドスケープは今日の都市を形成する主たる要素(インフラ)として建築に取って代わりつつある。水平に広がるサーフェスとインフラが伝統的な都市の空間的集中と建築物に取って代わる。このような新たな都市が形成される中で、ランドスケープは公園や庭園といった枠にとどまらない。ランドスケープは高速道路、汚染された工業地、準郊外のニーズ等に関与する。』という流れはもはや止まらないものと考えます。このランドスケープ分野の潮流を理解するにサイモンズの“ランドスケープ アーキテクチャ”を読むことによってその基礎が養われ、さらにこの本がランドスケープ・アーバンイズムに続く現代のランドスケープ分野の課題を理解するバイブルとなる著書であると私は期待しています。



新たに翻訳された“ランドスケープ アーキテクチャ”の第4版(鹿島出版会, 2010年)